

合なども、かたするを故實なるよしつたへ侍りしかどもちかき世よりはさることもなく、たゞすぐよかによしあしを申なるべし、香のよしあし勝負さだまりて、さてかうの名の名つけざま、詩歌物語、催馬樂、管絃の譜やうのものなりとも、とりどころそのよしあしあり、體なきことばなどにてなづくるは、よはきによりてあしとす、左右たがひにこゝろの底のこらすいひて、勝負を究めかうにはひすがりまでもかちたりといふ共、名まけたらば持なるべし、かうまけたりといふとも、名かちたらば持なるべし、かうのよろしきより、名のよろしきを譽とす、香よくなもあひぐしたらば、いふにたらぬ勝なるべし、香にいにしへよりの名ありて、たとへばらむじやゑ、などいふとも、其香合にのぞむときにあたらしくなをつけていだす、香合の法なり、幾度のかうあはせに、同香を出すといふとも、名をだにあたらしくせば、作者のてがらなるべし、一座に同香いだす事は制なるべし、

〔倭訓采前編十二〕すがる 物の末になりて、盡なんとするを、すがるといふ、末枯の義成べし、中

略 香のすがりは、本草に尾煙と見えたり、

〔香道秘傳書〕名香合儀、一番より十番迄二炷宛二十炷可通、人數も十人たるべし、然ば一人より二種宛香を可被出、其香に太子東大寺をば被相除、其外十種之内、又五十炷之内を可被出候か、むすびに二種通り候香之内、はじめたくをば左と定、後にたくをば右と定、左の香よきと思ふ時は、左の札を可打、右の香左よりもかほりまさりて覺ば、右の札を可打、札の調様は、六分半、長さ一寸九分、又あつさ一分半に、杉の板をけづり、其面に我々の名乗を書、うらには左と一枚、又右と一枚、可被書候、包紙をばうすやう一枚を八ツに切て、其はしをほそく名紙にたちかけて、香の名を上書、其下に香主之名乗を書、四ツにたゝみあげて、ひねりふみの様に可在之、同紙の中に香をつ、み候、おさあひ人の十種香とて、もてあそぶ時のつゝ、み候ごとく、何も口傳在之、去比於宅興行之